

聖書：申命記 15章 12～18節

モーセは、四十年の荒野の旅を終え、いま約束の地を前にしています。約束の地に入ったとき、あなたがたはどのように生きるべきなのか、神のみことばを語ります。

エジプトから出てきた当初は、生活レベルの差などほとんどありません。みな同じです。土地も家もありません。同じものを分け合い、食べる、そんな仲間たちでした。しかし、後に約束の地に入り、落ち着いてくるとじょじょに生活レベルの違いが明らかになっていきます。すべてが神の家族、同胞であると言われていたのに、病気やけがで働けなくなる、妻と子どもを残して夫が死んでいく、そんなことが起こる。なかには生活に困り、奴隷として売られていく者が出てきました。いっぽう財産があり奴隷を雇うほど余裕がある者もいました。持つ者と持たない者の格差がイスラエルにもありました。約束の地と言っても理想の天国ではありません。逃れることのできない罪の現実がありました。

今の時代ならこんな風に言うでしょう。「生まれたときはみな平等であり、チャンスも平等に与えられている。人生に勝ち残るために努力しなさい。人生に負けて、奴隷となったというのなら、それはその人の責任である。」

聖書はなんとやっているか。「もし、あなたの同胞、ヘブル人の男あるいは女が、あなたのところに売られてきて六年間あなたに仕えたなら、七年目にあなたは彼を自由の身にしてやらなければならない。」

今の時代、家を買っても親だけでローンを払えない人は、親子二代にわたってローンを

払う、そういう仕組みがあるくらい、借金はどこまでもついて回る仕組みになっています。

ところが聖書には、経済の常識を覆すような話が堂々と載っています。借金を払うためには六年間働かなければならない。そこまではよい。驚くのは、七年目には必ず自由にさせなければならない、そう書いてある所です。どんなに借金が残っていても、七年目にはゼロになる。そう言っているのと同じです。そればかりではなく、13節ではこうも言います。「彼を自由の身にしてやるときは、何も持たせずに去らせてはならない」なぜそうするのか。18節にあります。「彼は六年間、雇い人の賃金の二倍分をあなたに仕えたからである。」奴隷は主人のために普通の人の二倍働いたと計算します。二倍働いたのだからその分をきちんと払いなさい。今のことばで言い直せば、退職金を払いなさいということです。

奴隷を雇う主人は当然こう思うでしょう。「たくさんの借金をした奴隷で、その支払いも終わっていないのに、七年目にどうして自由にしなければならないのか。そのうえどうして退職金まで払わなければならないのか。納得できない。」

雇う人たちから文句が出るような制度であることは、神もご存じです。それでこう言います。15節前半。「あなたは、エジプトの地で奴隷であったあなたを、あなたの神、主が贖い出されたことを覚えていなさい。」

あなたはかつてどこにいた者だったのか。エジプトで奴隷の身分でいたのはあなたで

はなかったのか。奴隷の身分から解放され、自由となったのはあなたの努力によるものなのか。あなたは最初から裕福な人間だったのか。そうではない。エジプトを出たときは、ほとんど何も持っていなかった。それなのに、全部自分の努力で手に入れたと思っているのか。あなたが今自由の身になり、裕福となったというのなら、それは全部あなたの神、主があなたに祝福として与えたものではなかったではないか。それを、どうして自分のものだと思ひ込み、奴隷に与えることを惜しむのか。

私たちは奴隷を雇うことはありませんが、ときどき自分のものを誰かに与えなければならぬことがあります。物でも時間でも、あるいはお金でも、差し出すべきものが大きくなればなるほど、心の中に惜しむ気持ちがわいてくることがあります。もっと少なくても、もっと安いものでもよいのではないか。心の中で取引をして満足しようとしています。そんなとき神は問いかけます。あなたが手にしているものはだれが与えたのか。あなたはどこから救われ自由となったのか。

いっぼう奴隷の立場に立つなら、この神の命令は希望を与えることとなります。どんなに借金をしたとしても七年目には必ず自由になる。ここにあるのは単なる経済の話ではありません。主が与えてくださる救いの話です。私たちは売られて罪の奴隷となっていたものです。一生そのことで苦しまなければならない。みんな、多かれ少なかれ、そういうものを背負い込んでいます。死ぬまで苦しむしかないときとあきらめています。

ところが神はなんと行ってくださるか。奴隷の期間は六年だけ。七年目には自由になる。お土産を沢山もらって家に帰ることができ

る。あなたの抱えている重荷は一生死ぬまで続くのではない。そういう約束をしてくださっているのです。

よかったよかった。ということで終わりですが、ところでその借金はどうなるのでしょうか。帳簿の数字をゼロに書き換えて終わりでしょうか。会計に詳しい方はわかるはずです。そんなごまかしは絶対にできません。だれかが借金を払わなければなりません。だれが払うのか。神がこのような命令されたのですから、神が責任をとります。神のひとり子である方が、借金を肩代わりし、その方が十字架で支払う。そのようにして神はバランスをとろうとされます。

今日からまた新しい一年が始まります。またひとつ年齢が増していくこと残念に思う方もいます。しかし全然違う味方をすることもできます。新しい年を迎えたと言うことは、今はまだ罪の奴隷の中にいるけれど、自由になる日がまた一歩近づいたことを意味します。

昔の人は、自由になる日のことを「年季明け」と言ったそうです。私たちににとって年季明けとは、主が来てくださる日を指します。私たちはその日を共に待ち望んでいます。この一年も、またともに祈りあいながら、励まし合いながら、天の御国に近づいていきたいと願います。